令和４年度　英語教育推進事業

令和４年度教科部研修会のまとめ　～分かったこと・考えたこと～

羽島市立竹鼻中学校　英語科

疑問①　「使いながら身に付ける」英語の授業とは、具体的にどうすればよいか。

「言葉」は、文法事項や語彙などを完全に身に付けてから使うものではなく、**試行錯誤して伝え合う中で、気付き、修正することを繰り返しながら、長い時間をかけて身に付ける**ものだと改めて確かめました。そのため、**授業でも、生徒が「実際に英語を使って○○する」場、何度も試したり修正したりする場を位置付け、その途中で、「これを使えば、言いたいことが言える」と気付いたり、正確さに意識を向けたりするような指導**をすることが大切であると分かりました。

疑問②　「言語活動を通して指導する」とは、具体的にはどのような展開・指導をすることか。

「言語活動」を行う目的は、**知識・技能を活用して思考・判断・表現する力を育成する**ことだと理解しました。そのため、授業では、生徒が、**コミュニケーションの目的に応じて、**

①｛必要な情報・概要・要点｝を捉えて聞く・読む活動

②伝えたい内容と用いる言語材料を、「自分で考えて」、事実や自分の考えなどを話す・書く活動

の時間をできるだけ多く位置付けることが大切だと感じました。そして、生徒が①②の活動に取り組む中で、「１回目の対話では、言いたいことが思ったように言えなかったけれど、最後の対話では、言いたいことをより詳しく言えた！」などと思えるようにしたいです。そのためには、**初めから文法事項を示しすぎるのではなく、「伝え合う活動に取り組みながら、表現の有用性や正しさに気付いていく」という発想**が大切だと感じました。具体的には、対話の合間に、生徒が既習の言語材料を想起できるよう問いかけたり、どう言えば伝わるかを仲間と考える場を設定したりするなど、生徒が、「自分自身の伝えたい内容を、英語でどのように表現するか」を、自分で考える中で気付いていけるような授業を行いたいです。

疑問③　言語習得の過程を踏まえた指導とは、どのようなことか。

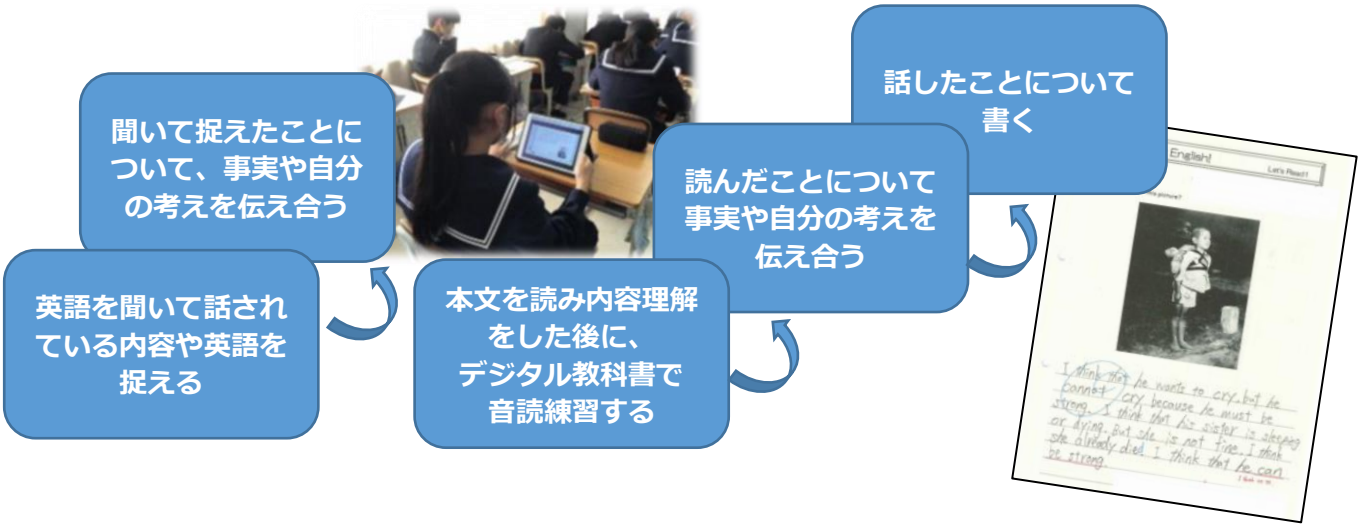
母語を身に付けるとき、子どもは「聞く」→「話す」→「読む」→「書く」という順番であることがほとんどです。第二言語として英語を学ぶ時も、この順番を意識して言語活動に取り組めるようにするとよいと感じました。例えば、単元の終末にスピーチを行う場合、「原稿を書いて、何度も読んで練習して、覚えたことを暗唱する」のではなく、授業の中で

① トピックについて**聞き**、内容や英語を捉える
② 聞いて捉えたことについて、事実や自分の考えを**話し**て伝え合う（相手を替えて繰り返し）
③ 同様のトピックについて**読み**、読んで分かったことや自分の考えを**話し**て伝え合う
④ 話したことを整理し、スピーチメモを作り、スピーチをする
⑤ スピーチしたこともとに、ポスターを**書く**

のように、「聞く」「話す」「読む」「書く」の順を意識して展開を考えるとよいと考えました。

※すべての時間で４技能５領域を扱うということではありません。

※「聞く」「話す」「読む」「書く」の順でしか展開しないということではありません。



疑問④　外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方とは、どういうことか。

研修会では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」について、具体的な場面を例に学びました。

【例】　場面：small talk　領域：話すこと（やり取り）　時期：中１前期

好きな季節とその理由や、それぞれの季節のよさなどについて伝え合うとき、「ちょうどよい気温だから秋が好き」と言いたいと思っても、「ちょうどよい」も「気温」も未習であれば、思い浮かんだ日本語をそのまま英語にして言うことができません。しかし、「ちょうどよい気温」を、「暑くもなく、寒くもない」状態だと考えることができれば、自分の知っている'hot'や'cold' などの英単語を使って"I like autumn. It's not hot, not cold, so I can relax!"などと言えそうです。このように、**「知っている英語で言えないか」「まず易しい日本語で言い換えられないか」**と考えてみることは、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方の一部です。このほかにも、様々なコミュニケーションの場で、例えば「相手が質問内容を理解していないようなら例を挙げてみる」など、見方・考え方を働かせて考えることを常に行っていれば、伝えたい内容をより適切に表現する力が高まっていくと考えられます。これからの授業でも、コミュニケーションの中で、どのような見方・考え方を働かせるとよいのか、具体的に考えて、展開に生かしていきたいです。

疑問⑤　「複数領域を統合的に指導する」とは、具体的にどのような展開・指導をすることか。

わたしたちが実際に人とコミュニケーションをするとき、「聞くこと」だけ、「話すこと」だけ…と、どれか一つの領域の力しか使わないことは考えにくいです。例えば、**「聞いたことを書いてメモする」「記事を読んで、その内容について話し合う」など、複数の領域の力を組み合わせて**コミュニケーションをする場合が多いです。だから、英語の授業でも、実際の生活に近い、**「英語を使って○○する」場面をできるだけ設定する**ことが大事だと感じました。

年間を通じて、

◎読む活動の後に、読んだ内容について事実や自分の考えなどを伝え合う活動を位置付ける

◎メインの活動として「話すこと（やり取り）」の言語活動を行ったら、授業の終末に、話した内容について書く活動を位置付ける

など、複数領域を統合的に指導する展開の工夫をしていきたいです。

疑問⑥　話すことが苦手な生徒には、どのような手立てが有効か。

話すことが苦手な生徒への手立てを考えるとき、まず「その生徒が、話すことが苦手である**要因は何か**」を考えることが大切だと、改めて感じました。「話したいことが思いつかない」と思う生徒もいれば、「言いたいことはあるけど、その場で考えて英語で言うのは難しい」「言い方が分からないけど、質問するのは恥ずかしい」などという生徒もいるかもしれません。簡単なことではないですが、「話すことが苦手」である理由を、**生徒の様子を見届けたり、生徒に直接聞いたりして、まず理解**したいです。そして、それぞれの苦手な**思いを受け止めながら**、"I want to go to△△. How about you? Do you want to go to ○○？ or ●●？"と、その生徒が**具体的に考えられるように投げかけたり、「思い浮かんだことをそのまま英語にしようとするのではなく、簡単な日本語にできないか、考えてごらん」などとアドバイスしたり**するなど、地道に支援していくとよいことが分かりました。そして、少しでもできたときには、できたこと、できつつあることを**その場で価値付け「できるようになった」ことを自覚**できるようにすることが大切だと分かりました。

話すことだけでなく、どの領域についても、英語が苦手だと思っている一人一人の思いを受け止めた上で、見捨てず、よさや成長を見逃さないで、価値付けていきたいです。